
You are my master.

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

You are my master .

【Nコード】

N1898P

【作者名】

【あらすじ】

僕の苦手な父さん。

その父さんが僕の16回目の誕生日に帰ってくるという。

僕の記憶の中じゃ、今まで一度だって僕の誕生日はおるか、妹の日だって帰ってくることはなかったのに。いまさら何の為に…。

それに最近妹の僕に対する態度が冷たい。

僕はなにかしてしまったのか？

12月24日。

心に暗雲立ち込める中、僕の日が始まった。

prologue 12月24日 朝（前書き）

はじめまして。

（オングストローム）といいます。

初投稿で粗末なのですが、よかったら見てください。

prologue 12月24日 朝

12月24日。

クリスマスイブの日。

僕の16回目の誕生日でもあったその日は僕の運命を変えた日だった。

晴れた普通の朝だった。僕の誕生日というこの特別な日を地球は一体何だと思っているのか、というくらい普通過ぎる一日の始まりだった。

「おはようございます。坊ちゃま」

寝間着のまま気怠い気持ちで部屋をでると使用人の薫さんが挨拶してきた。

「おはよう、薫さん。ってか坊ちゃま、はもう止めてくれって言ってるだろう」

すると薫さんはクスクスと上品に笑い、「何を仰いますか。坊ちゃまはいつまでも坊ちゃまですわ」と言いながら僕にガウンを着せてくれた。

実に手際のいい人だ。

一階の食堂には妹の遥香はるかが既に座って紅茶をすすっていた。

「おはよう」と声をかけるが視線をこちらに向けただけで何も言わなかった。

最近、妹の僕に対する態度が日に日に悪化している気がする。

そんな僕らのやり取りを見ていた婆やが遥香に「ほら、ちゃんと挨拶しなさい」と言っつて初めて遥香は僕に「おはよう」とぶつきらばうに言いったのだった。

僕が遥香の向かい側に座ると、準備をしていた咲希さんが朝食を食卓へ運んできた。

「おはようございます」

「おはよう、咲希さん。いただきます」

咲希さんも薫さんもぼくが3歳とか4歳の時に家に来た、住み込みの使用人さんだ。いわゆるメイドというやつだ。

二人ともまだ若くて美人なのに結婚とかは考えないのだろうか。歳については僕が中学生のとき咲希さんに聞いたときにトラウマがあるのでそれ以来、歳に関する話題を振ったことはない。

一方婆やは、こちらも年齢不詳だが僕らが生まれたときからいて母親のいない僕らにとっては母親のような存在だ。

まさか薫さんも咲希さんも婆やのように家で一生メイドを続けるつもりなのだろうか、できれば、そうはさせたくはない。

「ごちそうさま」

遥香が立ち上がって自分の部屋へと戻る。すると婆やが遥香が座っていたところへ座る。

「恵ちゃん今日、誕生日でしょ。おめでとう」
めぐみ

本日最初のおめでとは婆やか。

「ありがとう。けど恵ちゃんはやめてよ」

ただでさえ嫌いな名前なのに余計に嫌気がする。

「今日は終業式だけでしょ？終わったら早く帰って来てね」
「なんで？と言う前に婆やの口から「今日は旦那様もお帰りになるからね」と恐ろしい言葉が出た。」

「父さん……」

僕の中で時が止まる。

僕の父親、名を愛美^{あいみだいげん} 大源といい、言うまでもなく我が愛美家の
大黒柱である。

仕事の関係で父は家にはほとんど帰らない。

しかし僕と妹は父がなんの仕事をしているのか知らない。もしかしたら婆やは知っているのかもしれないが聞こうと思ったことはない。父が僕らに関心が無いように僕も父に対して関心を持たない。そう自分の中で決めてきた。

でも僕は父に感謝と尊敬の念は持っている。

この御時世に僕らに不自由が無いように使用人を3人も雇い、大きな家を持ち、そして僕らにお金に困る経験をさせてないぐらいの甲斐性のある人だからだ。

それでも僕は父が苦手だ。生活には困ってないが親が子供を他人任せに育てさせるのも気に入らない。そんな父だから、僕の記憶の限りでは父が僕の誕生日にいたことなんて無かった。

だから僕には父が帰ってくるのが怖かった。

恐る恐る婆やに「なんで父さんが帰ってくるの……？」と聞いたが、やはり答えは子供の誕生日に親が帰ってくるのに理由があるのか、という当たり障りのないものだった。

本当は婆やだって父さんが帰ってくるのは意外だったはずだが、気を使って触れないようにしているみたいだ。

「恵様。早く支度をなさらないと遅刻しますよ」

咲希さんがなんとなく気まづくなった雰囲気を感じてか否か、その場の空気を上手く流してくれた。

僕はそのまま部屋に戻って制服を着て家を出た。

たまたま遥香と同じタイミングで家を出ることになったが、同じ学校に行くにも関わらず、僕と一緒に行くとはしない。門の前に遥香と同じ学年でおそらく同じクラスの女の子と一緒にすぐに行ってしまった。

一緒にいた女の子でさえ一礼ぐらいはしてくれたものだが、全く妹に冷たくされるのは兄としてなかなか堪える。

そうでなくなったら今日は心に暗雲が立ちこめているというのに。

はあ――。

思わず深い溜め息がでる。

「おはよーっ」

いきなり僕に後ろから抱きついてきたのは近所に住んでる幼なじみの友美だった。

「お誕生日おめでとっ。めぐう」

そういいながら僕の背中では暴れる友美の取り柄は人懐っこいことと元気な事という犬みたいな奴だが、そのどっちもが今の僕にとっては起爆剤だった。

元気にじゃれてきたことによつて友美は理不尽にも学校までの道のりで僕の鬱憤^{うつぶん}をはらす捌け口になってしまったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1898p/>

You are my master.

2010年11月28日12時08分発行